

建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠（４）：
中期：「面の構成」から「真壁の意匠」へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝日, 海秀, 市川, 秀和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028616

建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠(4)

— 中期:「面の構成」から「真壁の意匠」へ —

Professor-Architect Tadao Igarashi and theory of Architecture “SHINKABE” (4)
— The middle stage: From “Composition of Plane in Architecture” to “SHINKABE” —

朝日 海秀*
(福井工業大学大学院 博士前期課程)
市川 秀和**
(福井工業大学建築土木工学科)

1. はじめに —五十嵐直雄と戦後建築界—

戦後建築史に関する学術調査が全国的に進む昨今において、福井に焦点を当てた場合、五十嵐直雄は福井市の復興に尽力した中心的人物である。五十嵐は1938(昭和13)年に東京帝国大学を卒業した後、満州国国務院建築局へ就職のため大陸へ渡った。これは1931(昭和6)年に勃発した満州事変が深く関係しており、五十嵐を含めた当時の学生の進路に大きく影響を与えるものであった。

満州へ就職後は、新江市役所に勤務していた五十嵐であったが、1945(昭和20)年の終戦を契機に1年間の抑留生活を経て、地元の福井に帰郷することになった。そして五十嵐は帰郷後、福井工業専門学校建築科(現・福井大学工学部)の教授に着任し、戦災、震災から凄惨な被害を受けた福井市の復興に公共建築等の設計を通して尽力して行ったのである。

全国的に戦後復興は1950年代に入り大きく動き出して行く訳であるが、建築界では戦前、戦中期に主流であった帝冠様式などのナショナル主義的表現からの脱却、つまりモダニズムの視点から見た新たな日本の表現の再考が共通の課題となっていた。戦時中に抑圧されていたこれ等の動向は、戦後の解放感も重なり全国各地で活発化されて行くことになる。例えば戦後日本を代表する建築家である丹下健三は、ル・コルビュジエに見られるピロティなどの近代的手法を用いると同時に垂木、庇などの日本の表現をRC造で表現して、香川県庁舎(1959)などを新たに生み出して行き、自身のモダニストとしての立場を明かにしていた。この様に丹下を筆頭に多くの建築家たちの中で、モダニズムと日本の表現の新たな展開が試みられていた時代動向の中で、かかる福井の地において、その中心部の復興建築の設計を一任された五十嵐は、当時の全国的な風潮をどの様に捉えていたのであろうか。

五十嵐も当然これ等の動向を強く意識しており、具体的な設計と向き合いつつ、自身の建築に対する制作理念を模索して行った。そしてそれは、最初に建築空間が多様な面で構成されている点に着目して、「面の構成」として捉えて行き、その空間に秩序を与える面の性質・構成を意識して制作を行って行く。なおこの五十嵐の設計態度は、その後の独自の建築論確立へ至る初期の抽象的な「面の構成」であることが先の研究で明らかとなった⁽¹⁾。ここから五十嵐の制作理念は、戦後復興期の幾多の実務設計を通して、その論理と設計手法が同時に磨かれることとなり、より深化して行くのである。

そしてこのプロセスこそが、五十嵐の建築論確立へ至る「中期」⁽²⁾として捉えることが可能であり、戦後復興期の建築界の課題に取り込みながら、制作理念の大枠を構成して行く最も複雑な過程であると推察するのである。そこで本稿において、これ等の解明を試みたい。

(キーワード: 戦後建築 モダニズム 日本の表現 古典 福井神社 建築論)

* Fukui University of Technology (910-8505 Gakuen3-6-1, Fukui)

** 福井大学地域環境研究教育センター・学外協力メンバー Fukui University of Technology (910-8505 Gakuen3-6-1, Fukui)

表1 五十嵐直雄の思索過程とその主要論文等

初期	中期	後期
論文「面の構成について」(1954) 論文「面の緊張感について」(1955)	随想「古典」(1953) 論文「神社について」(1955) 講演論文「日本建築の伝統について」(1958)	論文「真壁の意匠」(1964)

では五十嵐は、初期の「面の構成」からどの様に思索を展開して、当時の丹下健三等が試みた日本の伝統表現の再考など、戦後建築界の課題に取り組んで行ったのであろうか。

これに対する五十嵐の姿勢を明らかにするために本稿では、初期以降の中期に当たる論文等を扱い考察して行く。なおその思索過程における論文等を纏めたものが表1である。そこで本稿の導入として、五十嵐が直面した戦後日本の建築界の動向を著名な建築家の活動に着目して確認して行きたい。

2. 1950年代の日本建築界と新たなモダニズム表現

1950年代半ば、日本全土における復興事業は軌道に乗り出し、復興と同時に建築界では、これまでの戦前とは異なる新たなモダニズム表現が建築家たちの共通の課題の1つとなっていた。そこでまずは、その建築界の全国的動向を捉えるとともに、北陸地域（石川・富山・福井）にも着目して包括的に確認したい。また、これ等の動向を簡潔に纏めたものが次項の表2である。

2-1. 全国的動向 一丹下健三、大江宏の活動に着目して一

まず、当時の建築界の全国的動向を探るため、戦後復興に大きく貢献していた丹下健三と大江宏に着目して行く（図1）。ここで丹下、大江と五十嵐の間には、東京帝大時代の同期という関係性があり、その比較考察は本稿において有効であろう。

丹下健三は1938（昭和13）年に東大を卒業して同大学院で都市計画を専攻し、建築スケールからランドデザインへと、総合的に考える思考を模索していた。そして戦後1946（昭和26）年に東京大学助教授に就任し、博士号のテーマでもある都市計画の角度から戦災復興に着手して行く。さらに丹下は全国の戦災都市で最も甚大な被害を受けた広島復興に自ら名乗り出て、独自の都市計画的視点から復興計画案を創出し、見事にコンペで採用された広島平和記念公園（1955）が実現したのである。この計画案ではル・コルビュジェ風の近代的手法が用いられており、ここから丹下のモダニズム的思想が伺える。その後、丹下は市庁舎建築などを通して多大に戦後復興に貢献して行く訳であるが、そこでもモダニストとしての立場から日本の伝統の新たな表現の可能性を追求し、倉吉市庁舎（1957）や香川県庁舎（1959：図2）などの実作を通してそれを表現したのである。

次に大江宏は戦前の幼少期に父親の仕事の関係上で秋田や日光、東京へと転居を繰り返しながらも、特に日光の生活が、日本建築の伝統に日常的に触れる契機となり、大江の伝統を重んじる独自の視座が養われたのであろう。その後、東大を卒業して文部省、三菱地所を経て、戦後1950（昭和25）年に法政大学助教授に就任した。そして戦後の建築界が直面していた課題に対して大江は、戦前から養った独自の視座から取り組んで行く。ここで、大江にとってこの課題に対する契機となった出来事に戦後の法政大学キャンパス計画が挙げられる。そしてその最初の工事である55年館の工期中に大江は約半年間海外に出張することになった。これは大江が師と仰ぐ堀口捨己⁽³⁾からサンパウロ日本館（1955：図3）の現場管理を一任されたことによるものであった。また世界各国を訪れる中でフィリップ・ジョンソンとの出会い⁽⁴⁾も大きかったであろう。そして海外という異国体験から日本を見つめ直したことで大江は、建築に見る本質を日本の伝統木造に見出して回帰して行くのである。

以上の様な丹下と大江に見られる動向は、ほかの同時代の著名な建築家たち、すなわち前川國男⁽⁵⁾や清家清⁽⁶⁾、吉村順三⁽⁷⁾、アントニン・レーモンド⁽⁸⁾等によっても同様に取り組まれて行くこととなる訳であるが、この詳細に関しては割愛することにする。

表2 戦後日本の建築界の変遷と北陸の比較

		全国		北陸		
		丹下健三	大江宏	石川：谷口吉郎	富山：吉田鉄郎	福井：五十嵐直雄
1930 昭和5	東京帝国大学卒業 (1938)	父は建築家・大江新太郎 東京帝国大学卒業 (1938)	東京工業大学助教授に就任 (1930) 教授に就任 (1943)	富山県立福野農学校博物館 (1935) 通信院工務局営繕課を辞職 (1944)	東京帝国大学卒業 (1938) 終戦後1年間の抑留生活 (1945)	
1945 昭和20	〃 大学院に進学 (1941)					
1946 昭和21	東京大学助教授に就任			日本大学教授に就任	福井工業専門学校教授に就任	
1949 昭和24					福井大学助教授に就任	
1950 昭和25		法政大学助教授に就任				
1951 昭和26				北陸銀行新潟支店		
1952 昭和27				石川県繊維会館		
1954 昭和29		約半年間の海外出張	石川県議会議事堂			
1955 昭和30	広島平和記念公園	法政大学 55 年館 サンパウロ日本館			吉田医院	
1956 昭和31					福井大仏	
1957 昭和32	倉吉市庁舎				福井神社 いろは旅館	
1958 昭和33	香川県庁舎	法政大学 58 年館			五分市本山対面所	
1959 昭和34			石川県美術館		福井市体育館	
1960 昭和35					芦原ゴルフクラブハウス	

2-2. 北陸地域での動向 —谷口吉郎、吉田鉄郎の活動に着目して—

戦後建築の全国的動向に対し、次に五十嵐が拠点とした福井を含む北陸地域に着目して、まずは、石川の谷口吉郎と富山の吉田鉄郎の活動から捉えてみたい（図1）。

谷口吉郎は石川県金沢市に生まれ、1928（昭和3）年に東京帝国大学を卒業し、1931（昭和6）年に東京工業大学助教授に就任した。戦中・戦後の激動の時代を経験したこともあり、戦中のナショナリズムが強く表現された愛知県庁舎などに見られる帝冠様式を単なる「日本趣味」と見て批判したことから、当時の日本の伝統に対する軽率な思想に強い抵抗があったことが伺えると同時に谷口自身は、その対照的な意味合いの「日本趣味の本家」⁽⁹⁾を追求して行くのである。戦後、藤村記念堂（1947）を始め、数多くの作品をつくり出して行くが、それ等には一貫して地域性を感じ取ることが出来、意匠に留まらず素材、施工に至るまでをその地域の風土性を活かした設計であった。この様な理念は故郷・金沢の復興建築においても意識されており、石川県美術館（1959：図4）などがその好例である。またこれ等の風土性を意識した谷口の設計手法が、作品に共通して宿る静的で清麗な郷土の雪国を想起させる、所謂「清らかな意匠」⁽¹⁰⁾に繋がるのであろう。

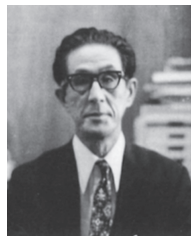
次に吉田鉄郎は富山県福野町に生まれ、1919（大正8）年に東京帝国大学を卒業して、通信省への就職を経て1946（昭和21）年に日本大学教授に就任した。また吉田が活躍した1920年から1950年代初頭では、特に日本の伝統とモダニズムをどの様に統合すべきかが問われていた時代であった。



丹下健三
(1913~2005)



大江宏
(1913~1989)



五十嵐直雄
(1915~1987)



谷口吉郎
(1904~1979)



吉田鉄郎
(1894~1956)

図1 五十嵐直雄と戦後復興期に活躍した建築家たち



図2 香川県庁舎
(1959)

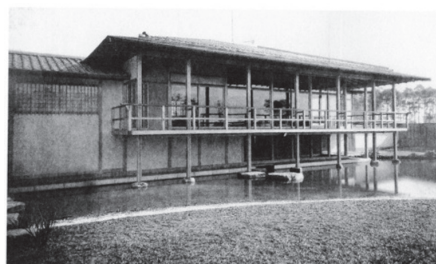


図3 サンパウロ日本館 (1955)

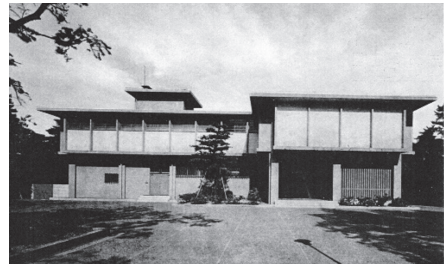


図4 石川県美術館 (1959)

そこで戦前に吉田が残した東京中央郵便局 (1938) や大阪中央郵便局 (1939) などの功績は大きく、それは単純に伝統とモダニズムを折衷するものでなく、むしろ架け橋を渡す重要な役割を果たして、戦後に所謂「通信モダニズム」⁽¹¹⁾ と称され全国的に展開した。また当時、日本滞在中のドイツ人建築家ブルーノ・タウト⁽¹²⁾ は自身の日記で「モダンであると同時に、真の意味での国民的な建築」⁽¹³⁾ と吉田を高く評価していた。かかる吉田の伝統とモダニズムに対する設計態度とは、日本の伝統木造を想起させる RC 造による柱・梁の表現であり、その柱・梁のフレーム構造をインターナショナルな意匠へ昇華させた設計理念には、吉田が強く意識した独自の「自抑性」⁽¹⁴⁾ が鍵語になるであろう。

また、谷口と吉田の建築作品から醸し出される同質の清麗で静的な空間現象には、北陸出身という共通の地域性が関係しているのであろうか。北陸の風土や文化がその背景にあるならば、福井出身である五十嵐においても精通する理念ではないだろうか。その詳細究明については谷口と吉田、五十嵐にみる建築表現の地域・風土性をめぐる比較考察が必要であるため、今後の課題としたい。

2-3. 福井の地での動向 —五十嵐直雄の活動に着目して—

戦後日本における動向から建築界の課題は、全国だけでなく北陸という地方においても重要なものとなっていたことが確認出来た訳であるが、かかる福井の地で戦後復興に取り組む五十嵐は、どの様にしてこれ等の課題に取り組んで行ったのであろうか。

五十嵐直雄 (図1) は、福井県坂井市に生まれて高校までの期間を福井と金沢で過ごし、その後、大学進学を機に東京へ移った。そして東大卒業後、満州での勤務を経て、戦後 1949 (昭和 24) 年に新制・福井大学の教員に着任し、ここから直ぐに戦災・震災からの凄惨な被害を受けた福井市の復興に着手して行く。ここで当時の福井大学には福井市から多くの公共建築等の設計依頼が寄せられていた訳であるが、これには福井市長・熊谷太三郎と福井大学教員との深い信頼関係が影響しており、詳細に関しては先の発表で報告した⁽¹⁵⁾。そして五十嵐は教育・研究者及び建築家 (プロフェッサー・アーキテクト) として設計活動を始めながら、初期「面の構成」の研究に取り組んで行ったのである。

五十嵐の初期の制作理念である「面の構成」とは、統一性ある建築空間の実現を目的とするもので、そのためにまず建築空間を抽象化して立方体に置き換えて行く。そして「面の構成」として捉えたその空間を統一性ある空間の実現に向けて、面の性質が重要な要素となると論究した。そして五十嵐は、その統一性の性質に「緊張感」を選択し、素材や面の構成パターンから思考して行くのである。この初期の論理が実現した具体的な例として吉田医院 (1955: 図5) が現存している。

この吉田医院は周囲の景観への配慮から一見、町家の雰囲気を重ねた表現とも捉えることが可能である。しかしそこには、五十嵐のモダニストとしての意図が確かに落とし込まれていた。当時 RC 造の主要なラーメン構造に対して、五十嵐は新しい構造形式である壁式構造を選択している。面への積極的な表現が可能となる壁式は、初期の論理を強く展開出来るものとして選択したと推察出来るのではないだろうか。従って吉田医院では、「面の構成」が強く考慮され窓枠・格子と RC 壁の直接的な構成、いわば素材・要素の対比によって空間に緊張感が与えられており、五十嵐が面の構成の事例として分析した3つの構成の1つである「一様な面」によって構成主義的に表現された。そしてその



図5 吉田医院（1955）



図6 福井大仏（1956）

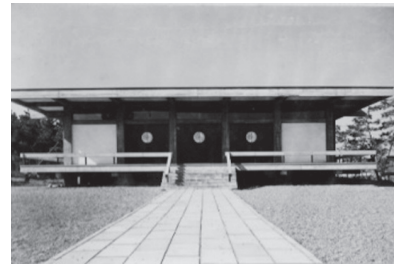


図7 福井神社（1957）

後の福井大仏（1956：図6）や福井神社（1957：図7）、福井市体育館（1959）などへ五十嵐は設計を進めて行く訳であるが、その設計態度は徐々に伝統・風土を重んじて変化したと考えられる。

以上のように五十嵐の作品変遷を概観すると、福井市の復興は全国の動向と関わりつつ1950年代に大きく動き出して行くことが理解出来る。それはつまり、丹下や大江等から考察した戦後建築界の課題は全国的なものとなっていたが、五十嵐の初期の思索は、それ等の課題に追従するような展開であるとは言い難い。しかし吉田医院から徐々にその作風は変化しており、五十嵐の独自の視座から進展させようとする姿勢を感じ取ることが出来るのである。では五十嵐は、初期の構成主義的な論理からどの様にして日本の伝統を捉えて行ったのかを、次にその中期の思索過程を通して考察する。

3. 中期の思索：「面の構成」から「真壁の意匠」へ

前項において五十嵐が、全国の動向を捉えながら建築設計と建築理念を独自に探究していたことについて確認出来た。これは制作と思索が同時に実践されたということであり、それにより生み出された作品は初期の思索による吉田医院から具体化されていくが、その後の中期への変遷とはどのようなものだったのか。そこで以下に、表2の中期における随想「古典」(1953)⁽¹⁶⁾と論文「神社について」(1955)⁽¹⁷⁾を扱い考察して行く。また残された講演論文「日本建築の伝統について」(1958)から次の論文「真壁の意匠」(1964)へ至る後期の展開の究明は、本稿では取り上げないことにする。

3-1. 随想「古典」(1953)から —モダニスト的着想による古典の意義—

五十嵐が初期「面の構成」から次の展開を模索していた姿勢を汲み取ることが出来る随想「古典」では、現存する有名な歴史的建造物から何か新しい示唆を得ようとして、奈良・京都を視察した際の体験が記されている。ではこの随想のタイトルにおいた「古典」とは、一体何を意味しているのだろうか。それは五十嵐の単なる見学の記録なのか、またはモダニスト的着想からの新たな意図が述べられたものなのだろうか。ここでの究明には、五十嵐が「古典」という言葉を選択した根拠を追究することが重要であろう。なお文中の「 」内の言葉は全て引用したものである。

① 古典に見た創造性

奈良・京都では法隆寺や妙喜庵、桂離宮などの視察を行い、五十嵐は以下の様に着目している。

「法隆寺夢殿。一千年以上も前に出来た、この八角のプラン、プランから必然的に浮び上る姿にはロマンとポエムがある。その姿に二重の廻廊の水平線の奥に静まる。天平の頃この建物はどんなにモダンでユニークであったことだろうと思う。建築はいつも、たえずモダンで独創的であればならないことを、皮肉にも、私は古典からおしえられた気がする。」

五十嵐は、まず「法隆寺夢殿」の「八角」という幾何学的形態に注目する。この形態に注目する点から五十嵐が単に歴史研究者ではなく、学生時代に表明したScientistとしての立場を出発点とした構成主義的な“建築家”として、この視察に臨んでいた姿勢を感じ取れるのではなかろうか。そして

「一千年以上も前に出来た、この八角のプラン、プランから必然的に浮び上る姿にはロマンとポエムがある。」という言説から、過去の人々が建築に込めて来た強い意識を感じ取っている五十嵐の思考を確認できる。これは当時「八角のプラン」が如何に斬新であったかを見抜いたものであり、そこから「ロマン」や「ポエム」という創造的なものを思い浮かべたのであろう。そしてこの着想は、歴史的建造物をモダニストの建築家として視察したことにより見出せた論拠にほかならない。

この様に五十嵐は「法隆寺夢殿」という建造物から単なる歴史的知識ではなく、制作に繋がる新たな創造性を感受したと推察することが可能である。そして、この時代動向に関わらず人々が常に新たなものを創造しようとする普遍的な姿勢を考察したことで、五十嵐は「建築はいつも、たえずモダンで独創的でなければならないことを、皮肉にも私は古典からおしえられた気がする。」という着想を抱き、自身のモダニストとしての理念を再認識する契機になったと言えるであろう。

② 古典における創造と模倣の関係

「夢殿」の視察体験から創造性を見出した五十嵐は、次に「法隆寺の塔」に着目し、現地にて屋根の形態から、以下の様に独自の考察を巡らせた。

「法隆寺の塔を解体修理して、屋根の旧材が陳列してあった。それは、初めゆるやかなスロープの屋根であった物を、後に束を足して急にしたことを示している。ゆるやかな勾配は大陸のプロポーションであり、現在アメリカ式フラットな屋根にあこがれるように、大陸のスタイルを真似たのであろう。しかし日本の風土にはかなわず、雨のもらないように改めたと考えられる。改まった現在の姿は、今私達には、かぎりなく美しい。それはほんとうの機能の勝利であらう。」

ここでも、まず「夢殿」と同様に「ゆるやかなスロープの屋根」や「ゆるやかな勾配」、「大陸のプロポーション」という「塔」の形態に着目する。そこから、その形態が「現在アメリカ式フラットな屋根にあこがれるように、大陸のスタイルを真似たのであろう。」と考察を深めたのであるが、ここにも「真似た」という五十嵐の着想に、歴史から創造性を汲み取った思考に対しての、さらなる進展を感じ取ることが出来るのである。「真似た」とは、すなわち“真似る”ということであり、つまりこれは“模倣”の言葉に置き換えることが可能である。創造に対して模倣とは一見、否定的に捉えられることが多い矛盾概念であるが、しかし五十嵐は、その模倣した「大陸のスタイル」が「日本の風土にはかなわず、雨のもらないように改められたと考えられる。改まった現在の姿は、今私達には、かぎりなく美しい。」と考察していることから、模倣に対して前向きな姿勢であったと感じ取ることが出来るのである。従ってこの五十嵐の視座とは、新たな創造のためにはゼロから生み出すだけでなく模倣することが重要であり、言わば“創造的模倣”と考えられる。そして、その模倣の本質を追求した創造とは、風土・時代性に淘汰される中で残って行くということを意味しているのであろう。言い換えると、模倣することによって創造性が喚起されるということであり、この節のタイトル「古典も真似をしたと云うこと。」の「古典も」というところから五十嵐は、両者の関係性を潜在的に意識していたことが読み取れる。またこの視察がその重要性を再認識する契機となったのであろう。

そして奈良・京都の歴史的建造物の視察を通して五十嵐は、本論の最終節のタイトルを以下の様にして締め括っているのである。

「古典には夢があると云うこと。」

これを五十嵐の視察に基づく考察の展開を踏まえると、歴史や模倣に創造性という普遍的な示唆を獲得したことによって、現代に繋がる、すなわち未来へと甦るという意味に置き換えられることから「古典」への立場に至ったのであろう。そして「古典」が時代ごとの新しさを内在している点に、モダニストとして抱く制作理念に共鳴したと解釈出来るのではないだろうか⁽¹⁸⁾。そして、そこに「ロ

マン」や「ポエム」という現代へ通じる創造的な思索が巡って「古典」に未来を、すなわち「夢」を見たものと推察するのである。

以上の様に五十嵐は、学生時代を出発点とした初期の「面の構成」にみる、独自の建築家としての立場から奈良・京都の歴史的建造物が持つ幾何学的形態に着目し、そこから創造性を考察した。こうした形態の考察をさらに深化させて、新たな創造を喚起するためには模倣が重要であると考え深めたのである。従って随想「古典」とは、五十嵐の単なる視察体験の記録ではなく、モダニスト的着想から日本の伝統を再考した新たな思索であることが明らかとなった。

3-2. 論文「神社について」（1955）から —建築の新たな表現・造形の模索—

そこで次に、昭和30年に発表された論文「神社について」へ考察を進めたい。まず論文の冒頭で、五十嵐は「福井神社の再建について、坂部先生より話があった」と書き出している。この「坂部先生」とは当時、福井大学建築学科主任の坂部保治⁽¹⁹⁾のことで、五十嵐が満州から帰郷後、福井工業専門学校に着任した後も指導を受けた人物である。そして福井の復興では先導する坂部を五十嵐が補佐しつつ公共建築等の設計を行い、「福井神社の再建」においてもこの2人を中心に進められた。

ここで論文冒頭に触れられた福井神社について、簡潔に触れておきたい。福井神社とは幕末の福井藩主・松平春嶽を祀る戦前最後の別格官幣社であり、昭和19年には、総ヒノキ造りの大きな社殿が完成したものの、翌年の空襲によって全て焼失した。終戦後は仮社殿が建てられており、市民生活のための復興事業が優先される中で、福井神社の再建は後回しになっていた。しかし、福井市の復興が落ち着きを見せ始めた昭和30年頃から当時、福井市長・熊谷太三郎は、戦災・震災からの復興を果たした福井市のシンボルとして、再建を考え始めていた。そして、福井市の熊谷から福井大学の坂部へ正式に再建計画が依頼された⁽²⁰⁾。

以上の様な背景を踏まえて、論文の書き出しから「福井神社の再建」は、坂部の下で五十嵐が設計を担当することになった経緯を確認出来る。ここで五十嵐は、初期から中期へと思索を展開する中で「これからの神社建築はどうあるべきかを、福井神社を通じて考えた」というモダニスト的姿勢において具体的に取り組んで行くことになった。ではその姿勢とは、どのようなものだろうか。

① 今後の都心にあるべき神社

五十嵐は、福井神社の再建について以下の様な問題意識を持って取り組んで行った。

「設計図面及写真によると、相当スケールの大きな流れ造りの様式によったものである。相当立派なものであったことがうかがわれる。そのまま再興が可能ならば、何も私共が関係しなくともよい訳である。しかし敷地の小さくなった現在、これを小さくすると云うこと、都心にあって二度の火災に会ったことに対する考慮、充分ならざる予算、そして現代の技術を以て如何なるスタイルを採用するか、ひっくり返して今後の都心にある神社建築はどうあるべきかと云うことが問題であった。」

まず、五十嵐の「そのままの再興が可能ならば、何も私共が関係しなくともよい訳である。」という言説から、福井神社の再建に当たり“何らかの理由”で従来の「流れ造り」での再現が、不可能との判断が読み取れる。その理由とはつまり、「都心にあって二度の火災にあったことに対する考慮」という3度目の焼失が許されない状況であったことが大きく影響しているのであろう。さらに福井市が、戦災・震災から復興したという歴史のリアリティと、なおかつ「都心」という中心部に再建する重要性から考察すると、単純に木造という選択ではなくて「現代の技術を以て」すなわち当時、最先端の耐火構造であったRC造での再建を検討するまでに至ったと考えられる。そこから五十嵐のモダニスト的思考に拠って「今後の都心にある神社建築はどうあるべきか」が検討されて行くのである。

そこで五十嵐は、従来の福井神社の「流れ造り」を含む神社様式の分析へと進む。そして、その方

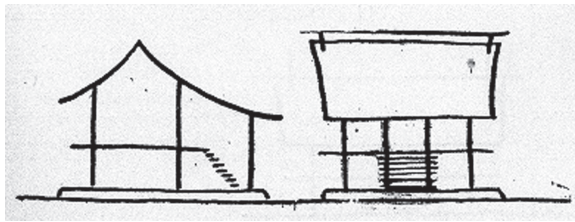


図8 流れ造りのスケッチ

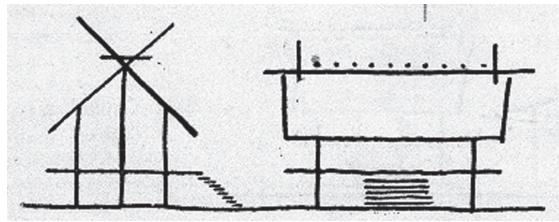


図9 神明造のスケッチ

法として「古典に学ぶのではなく、古典の中から適当なサンプルを撰択してくる」という「古典」の理念を進展させて試みる訳であり、いわば模倣的な創造によって模索して行ったと考えられる。

② 流れ造りの様式分析

五十嵐は、神社様式を考えるにあたり「古典の中から適当なサンプルを撰択」するために、現存する神社を視察することから始めた。そこには「過去の様式はそのまま現代に借用することに疑問を持っている私は、再現するに充分なるモデルがあるとは初めから考えていなかった。」という神社様式を単純にRC造で再現しないモダニスト的思考と「古典の中から意匠の根本的なものを求めたかった。」という「古典」に見る創造性、つまり前項で考察した五十嵐の独自性が確認出来る。

次に「流れ造り」の「サンプル」として京都の「護国神社」を視察し、以下の様に考察した（図8）。

「都心にあって、境内が小さく、こじんまりとした所が参考になるだろうとの、案内して下さった安齋宮司の話であった。境内に入ると左に細長いプランの社務所がある。三尺程の床高にぬれ縁が廻っている。セピア色の舞良の雨戸と白い障子が交互に入っている。この清潔な感じを見たとき、ひどくモダンだと思った。床高、ピロティ、それに深い庇で小壁のけられた立面構成は、天井一パイに一枚の建具をおさめた明るい現代建築に通じている。」

「都心」や「境内が小さく」などの「護国神社」の敷地条件を「福井神社」と重ねて考えながら、五十嵐は事前に視察する神社を選択していたのであろう。そして実際の視察により、「セピア色の舞良の雨戸と白い障子が交互に入っている。」という、いわば“素材・要素の対比”、及び“面の構成”という、ここに初期の視点からの考察を試みている姿勢を確認することが出来るのである。また「ピロティ、それに深い庇で小壁のけられた立面構成」という言説からル・コルビュジエの近代建築の原則を読み取ったのであろうか、そして「深い庇」等の日本の伝統と調和している点に「モダン」なものを見て取り、そして、これ等から誘発される「清潔な感じ」という性質、五十嵐の言葉に置き換えるなら“緊張感”が「現代建築に通じている。」と感じ取ったのではないだろうか。そして「護国神社」を「流れ造り」の「比較的純粹で代表的な流れの形式」と分析したことで、他に見られる「曲線の入った流れの屋根」に直線的な「千木勝男木が存在している」ことの矛盾的な組み合わせを見抜いて行く。そこから「流れ造り」の意匠的な特徴を曲線的なところに見たと考えられる。

最後に五十嵐は「護国神社」以外に視察した「竜安寺」にも触れており、「庭」の「石の布石」に見られる「人間的」なもの、と、神的領域という「非人間的」なものとの矛盾的な調和を指摘する。

③ 神明造の様式分析

次に「伊勢神宮」から「神明造」を分析して行く。そして冒頭を次の様に書き始めている（図9）。

「伊勢神宮は神明造の中の唯一神明造である。この直線式平入造は日本建築の代表として、すでに世界的なものである。今もってつきぬ新しい造形美をもっている。局外者としてではなく、さて自分が神明造の神社を設計しようとの立場に於て伊勢神宮を見た場合、それは非常なる重圧と

なつてのしかかつて来る。どうにも動かせないものではないだろうか。したがって、この流れをくむ神明造は、少なくともこの唯一神明の改悪されたものとしてのみ私の目にはうつるのである。従来、唯一神明の形式はそのまま他に使用することは禁じられていた。何か変更して建てねばならない。」

この様に「伊勢神宮」の様式を構成主義的立場から考察したことで「唯一神明造」が持つ「直線式」な構成に「今もつぎぬ新しい造形美」という現代へ通じる可能性を見出した。そして、この着想から「福井神社」再建の様式の最有力候補として「唯一神明造」が検討されたのであろう。

これによって「福井神社」の再建様式は「唯一神明造」を模倣することの根拠となる訳であるが、ここで、その模倣において、五十嵐は「従来、唯一神明の形式はそのまま他に使用することは禁じられていた。何か変更して建てねばならない。」という歴史的背景を踏まえた上で、独自の建築家としての視座から取り組んで行くことになるのである。

そして五十嵐は、ここから始まる“模倣的創造”の過程において「神明造」の特徴を見抜くために、「唯一神明造の持つ重圧の下から生まれて来た」と読み取った「流れ造り」を「神明造」の対局として取り上げて比較考察する。それにより「神明造」が「直線形式の持つ厳正さ、非人間性」であるのに対して、「流れ造り」においては「流れの持つ優美性、人間性」であるとそれぞれの本質を見抜き、ここからモダニスト的思考により新たな創造に繋げることを試みるのであった。

また文末にて五十嵐は、当時の「明治神宮」の再建問題⁽²¹⁾についても指摘しており、「神明造」ではなく「流れ造り」が採用された背景について「明治神宮はその格式性格よりして当然神明造の形式を採用してよいように私共には考えられるのであるが、あえてこれをさけられたのであろう。もし神明造の形式を採用していたなら、恐らく伊勢の重圧に抗すべくもなかったであろうと思う」と考察した。この「神明造の形式を採用」とは、単なる木造による再建を意味していたのであろう。五十嵐は、ここで明らかに自分とは違う設計態度の例として提示したものと推察する。

④ 神社建築の「単純性」と「鉄筋コンクリート」

そして次に五十嵐は、神社建築の精神性としての宗教性に着目し、そこから新たな建築表現への具体的な手掛かりを探ろうと模索して、神的なものを以下の様に捉えた。

「私は漠然と、神は自然そのもの、真理そのもの、無であると考え。したがって非人間的であると同時に人間一切を含むものと考え。あまり国粹的な考え方はしたくないのである。したがって色々の神社の神はその個有の神を通じてすべてこの概念につらなると考えたいのである。そう云った概念で神社として設定した場合、それは人間のリクリエーションの広場として設定されるべきものだと考えたい。何か純粹で抽象的なものの造型化されたものと考えたい。この意味から、神明造にしる、流れ造にしる、建築的には、単純性、純粹性の強調となって表現されて来たのではあるまいか。」

この様に五十嵐は「神」を「非人間的」なものと捉えると同時に、「人間一切を含む」という矛盾的な捉え方によって考察した。そしてその「真理そのもの」が「無」であると考えたことにより、神的な領域においては「単純性」、「純粹性」を追究する必要があるのであろう。

また、前項の「竜安寺の庭」で考察したように、神的領域における人間的なものを含んだ矛盾的な調和の構成に重要性を見出したことで、境内の構想では「人間的」な意味付けの必要性から「人間のリクリエーションの広場」として模索されたのであろう。

従って、神的領域に当たる拝殿・本殿等の建築物を「単純性」を追究した「神明造」の「直線式」による厳選された面構成として、そして人間的なものを取り入れた境内へと具体的な設計構想が創り出されて、次項の図 10 の様なイメージに繋がったものと推察するのである。ここからこの矛盾的な

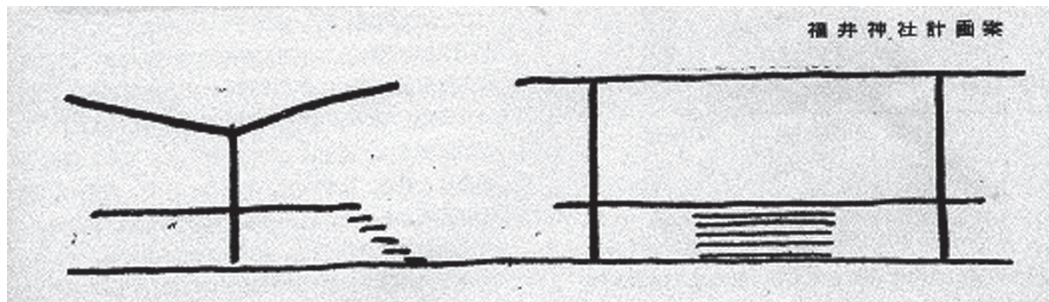


図10 福井神社のイメージ・スケッチ

要素を取り入れる展開に今後あるべき神社建築の新しさを見出し、五十嵐の中での確たる設計態度として確信を持ったのであろう。

そして最後に五十嵐は、「福井神社」の再建をモダニスト的視点から以下の様に述べている。

「福井神社の場合にも、鉄筋コンクリートによって、流れ造をそのまま再現したいとの話があった。鉄筋コンクリートを無理をして旧来の様式の仮柱に流しこんだ例は私も二、三見学したが、やはり無理が目立って正しい行き方でないことは従来も幾多の先輩の指摘していることであり、坂部先生初め皆の反対によって採用しないことになった。この場合耐火耐震的良さと造型的誤りが混乱して、その正しくないことを一般の人に説明するのは中々大変であることを感じた。」

今回の計画では最初、「鉄筋コンクリート」の「流れ造」による「再現」、所謂“模倣”での再建が持ち上がっていたことが確認出来る。しかしそこには「耐火耐震的良さと造型的誤りが混乱」という問題が発生した。これは、RC造が持つ構造的な利点と緻密な造型表現を得意としないという、もう一方の特徴を考慮すると、木造表現の再現が困難であるということの意味するであろう。そしてこのRC造が抱える複雑な問題を「一般の人に説明するのは中々大変である」という結論に至って、「坂部先生」を筆頭にして関係者の「反対」により実現しなかった経緯が明らかとなった。

そして、本節の冒頭に述べた“何らかの理由”とは以上のことであり、モダニスト的立場の五十嵐も“模倣”による再建には、否定的であった姿勢を次の言説から読み取れるのである。

「かつて完成した様式は、その時代の文化を背景としてその時代の最高の技術をもってその時代に入手し得る最高の素材を使用して出来たものである。私は過去の手本が示す造型の根本精神だけを学び取り、今日得られる最もよい材料として、鉄、コンクリート、ガラス、その他を使用しその材料のもつ機能に従って素直に設計をまとめてみたいと考えている。」

まず「かつて完成した様式は、その時代の文化を背景としてその時代の最高の技術をもってその時代に入手し得る最高の素材を使用して出来たものである」とは、時代ごとの新しさや伝統が発展継承されて残ってきたことを意味しており、まさに「古典」からの新たな創造が進展したのであろう。そして五十嵐は、「古典」が辿った「その時代」の「文化」や「技術」、「素材」という後世に甦るための要素を現代的な新しい創造へともたらし、同時代の建築家たちが取り組んでいたモダニズムと日本的表現の新たな展開を追求するという課題を捉えながらRC造での再建に至ったと考える。

そして、ここに「福井神社」の再建への確かな手ごたえを掴んだことで五十嵐は、自身の気概を「私はこれまで色々古典を見て、私なりに感じたことを書いて来たのである。新しい造型、新しい神社は現代の素材、技術、感覚でもって、これからスタートするのである。」と、力強く表明した。

以上の様に五十嵐は、初期の「面の構成」から同時代の建築家たちと同様の課題に取り組みながら

福井市の復興に取り組んでいたことを確認出来た訳である。そして日本の歴史的建造物の考察を通してその伝統表現を如何にして現代の建築に落とし込むかを思考して行き、「古典」から獲得した創造性という、“模倣的創造”によって「福井神社」の再建が具体化したことが明らかとなった。そして、この「福井神社」に現れる設計態度にモダニストとしての確かな自信と手ごたえを感じたことにより、その後の復興においてさらに深化して行くものと推察するのである。

4. おわりに ー後期「真壁の意匠」に向けてー

本稿は、福井市の戦後復興にプロフェッサー・アーキテクトとして貢献した五十嵐直雄がその後期の建築論「真壁の意匠」確立へ至る、初期から中期への思索の変遷を解明することを目的とした。

そこでまず、当時の日本建築界の全国的動向を捉えることを試みた。そのために丹下健三や谷口吉郎などを通して、五十嵐と同年代の建築家たちを全国的範囲及び地方的（北陸地域）範囲において比較考察した。それにより、日本の戦後復興期では、戦前までの国粹的表現からの脱却、つまりモダニズムと日本の伝統的表現の新たな展開を模索することが共通の課題となっていた背景を読み解くことが出来たのである。そして福井を拠点とした五十嵐も、この課題に対して取り組み、その姿勢は復興期に創造した作品の変遷に表れており、ここに初期から中期への思索の展開が見出せると考えた。

そしてこの作品変遷に現れる設計態度の論拠を解明するため、五十嵐が中期に発表した随想「古典」と論文「神社について」の考察を試みた。「古典」では奈良・京都の歴史的建造物を初期「面の構成」にみる独自の建築家としての立場から視察したことで、幾何学的形態に創造性を見出した。そして、この着想をさらに深化させて、創造を喚起するためには、その対局の模倣が重要であると指摘した。さらに「神社について」では福井神社の再建において、これ等の着想から取り組まれた姿勢を具体的に読み解くことが出来る。それは単に従来の流れ造り・神明造を再現するのではなく、それらを独自の視座から分析することによって見抜いた本質を、モダニスト的立場から進展させてRC造での新たな創造に繋げるために“模倣的創造”による設計へと到達した。そして「古典」からこの深化した着想に、モダニストとして現代に繋がる確かな確信を抱いたのであろう。

以上の様に、五十嵐の初期から中期へ至る思索の過程が、徐々に明らかとなって来た訳である。しかし五十嵐の後期の建築論「真壁の意匠」の本質といえる、日本の伝統形式「真壁」を意匠的に解釈する、論理展開については究明出来ていない。そこには残された中期の講演論文「日本建築の伝統について」から読み解くことが鍵になるであろう。そして、かかる建築論確立へ至る後期の思索過程の究明については、次回の課題としたい。

註

- (1) 朝日海秀・市川秀和（2020）「建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠（１）ー初期・面の構成についてー」日本建築学会近畿支部研究報告集 第60号
朝日海秀・市川秀和（2020）「建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠（２）ー初期・面の構成についてー」日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集
朝日海秀・市川秀和（2020）「建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠（３）ー初期・面の構成についてー」福井工業大学研究紀要 第50号
- (2) 註（１）の拙稿（２）で仮定した五十嵐の思索過程を改め、本稿では、次の様に位置付ける。
“初期”を建築の構成的な概念を扱う「面の構成」とし、そこから伝統とモダニズムの課題に取り込もうと模索する過程を“中期”、そして日本の伝統形式「真壁」を独自に解釈した「真壁の意匠」の建築論確立に至るまでの過程を“後期”と捉えることにする。
- (3) 堀口捨己（1895-1984）はヨーロッパの新しい建築運動への憧憬から東大同期生等と従来の様式建築を否定する分離派建築会を結成し、後に数寄屋造りの中に新たな美を見出し、伝統文化とモダニズム建築の理念との統合を図った建築家として有名である。
- (4) アメリカ人建築家であるフィリップ・ジョンソン（Philip Johnson 1906-2005）と大江との出会

いは、海外出張でグラスハウス（1949）を訪れた時であり、後に日本と西洋が調和する独自の制作理念へ繋がる示唆を獲得する。なお、次の文献を参照して頂きたい。大江宏（1989）『建築と気配』思潮社

- (5) 前川國男（1905-1986）代表作は「自邸」（1945）や「国際文化会館」（1955）など。
- (6) 清家清（1918-2005）代表作は「森博士の家」（1951）や「私の家」（1954）など。
- (7) 吉村順三（1908-1997）代表作は「国際文化会館」（1955）や「南台の家」（1957）など。
- (8) アントニン・レーモンド（Antonin Raymond 1888-1976）代表作は「夏の家」（1933）や「東京女子大学」（1934）など。
- (9) 八束はじめ（2000）「転向の射程」（『建築文化』収録）
- (10) 谷口吉郎（1948）『清らかな意匠』朝日新聞社
- (11) 日本大学桜門建築会（2017）『吉田鉄郎没後 60 周年記念展』
- (12) ブルーノ・タウト（Bruno Taut 1880-1938）はドイツ表現主義の建築家として有名である。書院造・数寄屋造の中にモダニズム建築に通じる空間構成があることを評価し、日本人建築家に伝統と近代という問題について大きな影響を与えたとされる。
- (13) 文化庁（2019）『吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋』
- (14) 吉田鉄郎（1942）「建築意匠と自抑制」『建築雑誌』1977 年 11 月号
- (15) 市川秀和・朝日海秀（2019）「福井市の戦後復興と公共建築の意義 —福井大学建築教員の活躍から—」北陸都市史学会誌 第 25 号
- (16) 五十嵐直雄（1953）「古典」（『福井建築士』第 2 号）
- (17) 五十嵐直雄（1955）「神社について」（『福井建築士』第 5 号）

なお、五十嵐の主要な作品と論文等は、資料冊子として纏められており、以下を参照して頂きたい。

市川秀和・朝日海秀編（2019）『建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠』福井工業大学市川研究室

- (18) 五十嵐の「古典」への着想は、建築論の京都学派と精通する理念と考えている。それは、この様な思考に至る背景には当時、福井大学に非常勤講師として来校していた森田慶一や増田友也等からの影響が大きく関係していることに拠る。なお、以下を参照して頂きたい。

市川秀和（2014）『「建築論」と京都学派 —森田慶一と増田友也を中心として—』近代文藝社

- (19) 坂部保治（1891-1968）は大正 4（1915）年に東京帝国大学建築学科を同期の野田俊彦らとともに卒業した後、大正 12（1928）年に福井高等工業学校（現・福井大学工学部）の創設と同時に着任して主任教授となった。なお、以下を参照して頂きたい。

長田涼佑・市川秀和（2018）「建築家・坂部保治の経歴と建築活動について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第 61 号

- (20) 詳細に関しては、註（15）の拙稿を参照して頂きたい。
- (21) 明治神宮と福井神社をめぐる同時期の再建問題は、歴史的背景を踏まえた上で比較考察する必要があるため、次の課題としたい。

図版出版

- 図 1 丹下健三：『広島平和記念館と丹下健三』三友社 1980
大江 宏：『別冊新建築・日本現代建築家シリーズ⑧ 大江宏』新建築社 1984
五十嵐直雄：市川秀和・朝日海秀（2019）『建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠』福井工業大学市川研究室
谷口吉郎：『谷口吉郎著作集 第 1 巻』淡交社 1981
吉田鉄郎：向井寛・内田祥哉編（1969）『建築家・吉田鉄郎の手紙』鹿島出版会
- 図 2 『香川県庁舎 1958』西日本出版社 2014
- 図 3 藤岡洋保（2009）『表現者・堀口捨己』中央公論美術出版

図4 石川県建築士会（1961）「石川建築士創立十周年記念号」

図5 福井県建築士会（1956）「ふくいけんちくし」第6号

図6～10 市川秀和・朝日海秀編（2019）『建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠』福井工業大学市川研究室

謝 辞

本稿は、2020年 JIA 日本建築家協会・建築系学生支援事業の研究助成による成果の一部である。
ここに明記して深謝申し上げます。

